

# 中学校学習指導要及び解説における道德教育の評価に関する規定の変遷

	学習指導要領	学習指導要領解説
昭和33年	規定なし	<p>第5節 評価</p> <p>1 評価のねらい</p> <p>道德の時間も一定の目標と計画に従って指導されるものであるかぎり、評価を必要とすることはいうまでもない。各教科における評価と同様に、道德の時間の指導の評価も二つのねらいをもつと考えることができよう。一つは、道德の時間の指導について各学校が設定した指導計画の評価であり、もう一つは、生徒の道德性が目標に照してどのような発達をとげたかを知るための評価である。</p> <p>しかし、生徒の道德性の評価は、教科における学習成果の評価とは性格を異にするものであることは、道德教育や道德の時間の性格からいって当然である。したがって、特に道德の時間だけについて、教科の場合と同様な評点による成績評価を行うことは適当ではない。</p> <p>3 道德性発達の評価</p> <p>ひとりひとりの生徒や学級・学校の生徒全体の道德性が、道德の目標に照らして、どのような発達をもたらしかたかを明らかにするのが、道德性発達の評価のねらいである。もちろん、これによって生徒の道德性の発達の程度を知り、今後の指導の充実を期するわけであるが、同時にそれは、これまでの指導計画や指導方法の反省・改善の資料としても役立つものである。その意味では、道德性発達の評価は、前述の指導計画の評価の一部であるとも考えることもできる。このような趣旨からみても、また、次にも述べるこの評価の技術的な困難さという事情から考えても、くり返すようであるが、<u>生徒の成績を評点によって示すようなやり方は、厳に戒めなければならない。</u></p> <p>ところで、道德教育は人格の全体に関連するものであるから、その評価も、人格の全体にわたって総合的に行われるものでなければならない。このことは、技術的にみてきわめて困難なことである。ただ、道德的な知識や判断力については、ある程度客観的に測定しうる面もあるが、道德的な心情や態度についての評価は、いっそう困難であり、特に後者の場合、道德の時間の指導の成果だけについて評価するなどということは、現状では不可能だといっよよいであろう。さらに、総合的に評価するという立場からいえば、このように道德的な知識や判断力の評価と道德的な心情や態度の評価とに区分して考えること自身が、一つの便法にすぎないものであり、実施の上で仮りに区分して評価した場合にも、その解釈においては、必ず両者を総合して判定するという留意が必要である。</p> <p>道德的な知識や判断力の評価の方法としては、各種の方法が考えられるが、道德の時間における生徒の言いやや作文、日記などの生徒の書いたものも、評価の資料として役立つであろう。しかし、この評価を集団的に行おうとする場合には、質問紙による方法やテスト法によることもできるであろう。</p> <p>道德的な心情や態度の評価の方法としては、教師による評価（観察、面接、テストなど）、生徒の自己評価（チェックリスト、作文など）友人による評価（ゲスフーテストなど）および父母による評価（質問紙、教師の面接など）等の広い角度から資料を求めて行うことが望ましいであろう。また、数人の教師の意見を集めて、総合的な判定をするという方法も、この場合適切であるといえよう。</p> <p>4 指導要録の「行動の記録」との関係</p> <p>指導要録における「行動の記録」は、生徒の生活において指導されるべき望ましい行動の項目も取り上げている。したがって、これらの項目は、道德性の発達の評価の項目と一致するものも少なくない。しかし、「行動の記録」の項目は、ひとりひとりの生徒について、各教科や特別教育活動など、生徒の学校における生活のすべてにわたる行動の特徴に関して評価するものであり、道德の時間の評価と一致するものでありえない。</p> <p>このようにはいっても、道德性の発達の評価と「行動の記録」との関係は、きわめて密接なものであるといっよことは疑いがない。道德的な心情や態度について個人的な評価を行った場合には、その関係はいっそう密接なものとなるといっよよいであろう。このような点からみて、「行動の記録」について記入する場合には、道德性の発達の評価の結果を、その資料の一部として参照することも考えられる。</p>

昭和44年	<p>第3 指導計画の作成と内容の取り扱い</p> <p>4 <u>道徳の時間の評価の一環としての生徒の道徳性の評価は、各教科における評定と同様に評定するものではないが、指導上たいせつなことであり、指導計画や指導方法の改善の基礎をなすものでもあるから、それが適正に行なわれるように努める必要がある。</u></p>	<p>終章 道徳教育と評価</p> <p>道徳教育における評価には二つの面が考えられる。その一つは、生徒の道徳性が、指導の結果どれだけより望ましいものになったかの評価であり、他の一つは、指導に当たって用いられた指導計画や指導方法が、はたして適切であったかどうかの自己評価である。学習指導要領の「第3 指導計画の作成と内容の取り扱い」の4には、評価に関して、「道徳の時間の評価の一環としての生徒の道徳性の評価は、各教科における評定と同様に評定するものではないが、指導上たいせつなことであり、指導計画や指導方法の改善の基礎をなすものであるから、それが適正に行われるように努める必要がある。」と述べているが、このことは、単に道徳の時間の指導についてのみならず、同時に、学校の教育活動全体を通ずる道徳教育に関しても妥当することである。</p> <p>従来、<u>道徳教育あるいは道徳の時間に関する評価</u>といえは、もっぱら指導計画や指導方法の評価のことと解され、<u>生徒の道徳性がどのように変わったかの評価</u>に関しては、<u>みるべき進展を示すことができなかつた</u>。技術的に多くの難が伴うこともさることながら、事が生徒の人格全体にかかわるものであるだけに、教師のがわに、これをためらう気持ちの抜きがたいものがあつた結果であろうが、道徳教育のよりいっそうの充実は、これらの点についての今後のくふうにまつところが大きい。</p> <p>生徒の道徳性の評価については、観察法、面接法、質問紙や検査、あるいは作文などを用いる方法が行われてきている。それぞれに一長一短はあるが、これらを適切に組み合わせることによって、所期の目的に近づくことがたいせつである。</p>
昭和52年	<p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い</p> <p>6 <u>生徒の道徳性については、常にその実態を把握するよう努める必要がある。しかし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。</u></p>	<p>第4章 道徳教育における評価</p> <p>1 道徳教育における評価の意義</p> <p>教育における評価は、生徒にとっては自分の成長を振り返り、確認する契機となるものであり、教師にとっては、指導計画や指導方法の改善に役立つものである。したがって評価は、日常の指導に即して行われるものであり、また、指導の一つの区切りごとに行われるものでもある。</p> <p>このことは、道徳教育における評価についても、同じように考えることができる。更に、道徳教育における評価は、教師が生徒の人間的な成長を見守り、そのよりよく生きようとする努力を評価し、勇気づけるはたらきをもつものと言うことができる。</p> <p>中学校学習指導要領第3章「道徳」の第3「指導計画の作成と内容の取扱い」の6には、「生徒の道徳性については、常にその実態を把握するよう努める必要がある。しかし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。」と示されている。</p> <p>生徒の道徳性については、一人一人の生徒や、学級、学年、学校の全生徒の道徳性が、道徳教育の目標や内容に照らして、どの程度成長したかを明らかにするように努めることが大切である。そのためには、指導前や指導後の生徒の実態をできるだけ把握するように努める必要がある。その際、生徒を一人の人格として、その全体として把握することが大切である。</p> <p>また、道徳の時間はもちろん、学校の教育活動全体を通じて行われる道徳教育の結果についても、これを反省し改善するための資料を収集するように努めることが大切である。このことを通して、指導計画や指導方法が練り直され、新しい指導の工夫に役立つものとなるのである。</p> <p>2 道徳性の評価</p> <p>道徳性の評価の観点としては、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的態度などと分けて評価することがありうる。しかし、道徳教育は徳目の理解やその一方的な注入を目指すものではないから、生徒の実態の把握、あるいは評価というとき、<u>生徒の人格的な成長に着目する必要がある</u>。</p> <p>道徳性の発達・変容は、短時間のうちに目に見えてなされるものもあるが、一般には長期にわたる指導にまつものである。したがって、<u>短い期間における理解力や判断力の変容を評価することも必要であると同時に、主題の終了時や学期の終了時、あるいは半年、1年という指導の時間の流れの中で、その成長を見ていくように配慮することが必要</u>である。道徳の指導を通して、生徒の内面に変化が生じることは事実であるから、困難なことではあるが、常に評価に留意していることが大切である。</p> <p>(1) 道徳性の評価の方法</p> <p>道徳教育の評価のための特別な方法があるわけではなく、一般に教育の中で用いられるものが同様に使用されるが、ここではそれらの方法について、道徳教育に関係のあることのみ簡単に触れておく。</p> <p>ア 観察による方法</p> <p>観察は、生徒のあるがままの行動を観察するもので、毎日の生活で行われている。この方法で大切なこ</p>

とは、観察の積み上げである。すなわち、1回限りでは分からないことも、記録されたものが多くなると評価に役立つものとなる。あらかじめ観察の観点を定めておくとよい。また、記録用のチェックリストや評価尺度を用意するのもよい。

イ 面接による方法

直接に生徒と対話して話すことにより、その考え方、感じ方などを評価しようとする方法である。面接が進行するにつれて、生徒の心情や態度までを評価することが可能になるので、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的態度を評価するのに有効な方法と言えよう。しかし、生徒の考えていること、感じていることなどをあるがままに把握するには修練を必要とし、また生徒との親密な人間関係が前提条件となる。

ウ 質問紙、検査などによる方法

質問紙法は、あらかじめ作成してある質問事項に回答させることにより、必要な資料を収集しようとするもので、主として道徳的判断力や道徳的態度の評価に適している。

また検査法は、生徒が問題場面に直面して、善悪を正しく判断できるかどうかを見るための方法である。したがって、道徳的判断力の評価に適している。また、文章完成法なども用いられる。

エ 作文による方法

作文には、生徒の生活体験、反省、意見、希望などが感情を伴って述べられるので、生徒の内面を把握できることが多い。したがって、道徳の時間の進展とのかかわりにおいて書かせた作文から、主題についての判断や心情の傾向、その変容の様子を評価するのに適切である。また、個人やグループの日記や道徳ノートも有効な資料となりうる。

オ その他の方法

その他、テスト法、投影法、事例研究法などの方法がある。

(2) 道徳性の評価に関する留意事項

生徒の道徳性の評価に当たっては、次のような点に留意することが必要である。

ア 上述した方法は、一長一短があるので、この点をわきまえると同時に、幾つかの方法を組み合わせる用いるのがよい。

イ 資料が不十分であったり、矛盾するものがある時には、結論を急がず、他の資料を集め、また長い目で生徒の観察に努めることが望ましい。

ウ 資料の結果から、特に指導を要する生徒に気づいた時は、道徳の時間にとらわれずに、直ちに適切な指導をすることが必要である。その場合、何か特に目立つ生徒に限ることなく、すべての生徒について発達を促す方向において、一人一人に目を向けていくことが大切である。

エ 多くの場面や要因がはたらきあって道徳性を形成しているのであるから、広い視野から総合的に評価を考えることが大切である。

オ そのためには、いろいろな場面において、多くの教師の協力を得て評価の資料を得ることが望ましい。

平成  
元年

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

6 生徒の道徳性については、常にその実態を把握し指導に生かすよう努める必要がある。ただし、各教科における評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。

第5章 道徳における評価

第1節 道徳における評価の意義

教育における評価は、生徒にとっては自分の成長を振り返り、確認する契機となるものであり、教師にとっては、指導計画や指導方法の改善に役立つものである。したがって評価は、日常の指導に即して行われるものであり、また、指導の一つの区切りごとに行われるものである。

このことは、道徳教育における評価についても、同じように考えることができる。更に、道徳教育における評価は、教師が生徒の人間的な成長を見守り、そのよりよく生きようとする努力を評価し、勇気づけるはたらきをもつものと考えられる。

中学校学習指導要領第3章「道徳」の第3「指導計画の作成と内容の取扱い」の6には、「生徒の道徳性については、常にその実態を把握し指導に生かすよう努める必要がある。ただし、各教科にける評定と同様の評定を、道徳の時間に関して行うことは適切ではない。」と示されている。

生徒の道徳性については、一人一人の生徒や、学級、学年、学校の全生徒の道徳性が、道徳教育の目標や内容に照らして、どの程度成長したかを明らかにするように努めることが大切である。そのためには、指導前や指導後の生徒の実態をできるだけ把握するように努める必要がある。その際、生徒を一人の人格として、その全体像において把握することが大切である。

また、道徳の時間はもちろん、学校の教育活動全体を通じて行われる道徳教育の結果についても、これを反省

し改善するための資料を収集するように努めることが大切である。このことを通して、指導計画や指導方法が練り直され、新しい指導の工夫に役立つものとなる。

## 第2節 道徳性の評価

### 1 評価の観点と方法

道徳性の評価の観点としては、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度などと分けて評価することがありうる。しかし、道徳教育は内容項目の知的理解やその一方的な注入を目指すものではないから、生徒の実態の把握あるいは評価というとき、生徒の人格的な成長に着目する必要がある。

道徳性の発達・変容は、短時間のうちに目に見えてなされるものもあるが、一般には長期にわたる指導にまつものである。したがって、短い期間における理解力や判断力の変容を評価することも必要であると同時に、主題の終了時や学期の終了時、あるいは半年、1年という指導の時間の流れの中で、その成長を見ていくように配慮することが必要である。道徳の指導を通して、生徒の内面に変化が生じることは事実であるから、困難なことではあるが、常に評価に留意してこれを生かすことが大切である。

道徳教育の評価のための特別な方法があるわけではない。一般的には、資料収集の方法として、次のようなものが考えられている。

#### ア 観察による方法

観察は、生徒のあるがままの行動を観察し記録する方法で、毎日の生活の中で行われる。この方法で大切なことは、観察の積み上げである。すなわち、1回限りでは分からないことも、記録されたものが多くなると評価に役立つものとなる。あらかじめ観察の観点を定め、記録用のチェックリストや評定尺度などを用意して、組織的、計画的、継続的に観察を行い、客観性を保持しようとする方法もある。その際、観察によって得られた資料から、外にあらわれた行動傾向にのみとらわれることなく、生徒の気持ちを理解することが大切である。

#### イ 面接による方法

直接に生徒と相対して話すことにより、その感じ方や考え方を評価しようとする方法である。面接が深まれば、生徒の話す内容や話し方、表情からも心情や判断力、態度までも評価することができるので、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度を評価するのに有効な方法と言えよう。そのためには、面接の心構えや、技法の習得に努めるとともに、生徒との親密な人間関係を築き上げる努力が必要である。

#### ウ 質問紙、検査などによる方法

質問紙法は、あらかじめ作成した質問に回答させることにより、必要な資料を収集しようとするもので、主として道徳的判断力や道徳的態度の評価に適している。生徒の自己評価やグス・フー・テスト、保護者の目を通しての評価なども活用できる。

また、検査法は、生徒が問題場面に直面して、善悪を正しく判断できるかどうかを見るための方法であり、主として、道徳的判断力の評価に適している。さらに、判断した理由や心情を併せて問うことで、道徳的心情や態度を見ることもできる。

この他、文章完成法なども用いられる。

#### エ 作文による方法

作文には、生徒の生活体験、反省、意見、希望などが感情を伴って述べられるので、生徒の内面を理解できることが多い。したがって、道徳の時間の進展とのかかわりにおいて書かせた作文から、主題についての心情や判断の傾向、その変容の様子を評価するのに適している。また、個人やグループの日記、道徳ノートも有効な資料となりうる。

作文法による評価においては、作文の行間に込められた感じ方や考え方を的確に読み取ることが必要である。また、生徒との作文を受容的な立場から教師が感想を書いて返却することが大切である。

#### オ その他の方法として、投影法、事例研究法などがある。

### 2 評価の活用と留意点

ア これまでに述べた方法は一長一短があるので、この点をわきまえるとともに、それぞれの特徴を生かして幾つかの方法を併用するのがよい。

イ 資料が不十分であったり、矛盾するものがあるときには、結論を急がず、他の資料を追加したり、また長い目で生徒の変容を観察することが望ましい。

ウ 資料の結果から、特に指導を要する生徒に気付いたときは、道徳の時間にとらわれずに、直ちに適切な

		<p>指導をすることが必要である。その場合、特に目立つ生徒に限ることなく、すべての生徒について発達を促す方向において、一人一人に目を向けて働きかけることが大切である。</p> <p>エ 道德性の形成には、多くの場面や要因がかかわりあっているので、広い視野から総合的に評価を考えることとし、未知の部分も多いことに留意する必要がある。</p> <p>オ そのためには、いろいろな場面において、多くの教師の協力を得て評価の資料を得るようにすることが大切である。</p>
平成10年	<p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い</p> <p>5 <u>生徒の道德性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道德の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。</u></p>	<p>第7章 生徒理解に基づく道德教育の評価</p> <p>第1節 道德教育における評価の意義</p> <p>教育における評価は、生徒にとっては自分の成長を振り返る契機となるものであり、教師にとっては指導計画や指導方法を改善する手掛かりとなるものである。「第1章 総則」の「第6 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の2の(11)では、「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること」と示されている。</p> <p>一方、道德教育における評価については、「第3章 道德」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の5において、「生徒の道德性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。」と示されている。つまり、道德教育における評価についても、生徒自身による自己評価を生かして新たな目標への努力を支援するとともに、生徒の道德的なよさや道德的成長に対する共感的な理解に基づいて指導計画や指導方法を評価し、その結果を指導の改善に生かしていくことが求められている。</p> <p>したがって、学校の教育活動全体を通じて行われる道德教育及び道德の時間について、指導の前後における生徒の心の変容を様々な方法でとらえ、自らの指導を評価し、指導計画や指導方法の改善に生かしていく必要がある。</p> <p>また、道德性の評価においては、生徒自らが成長を実感し、新たな課題や目標を見つけられるよう、教師が生徒の道德的な成長を温かく見守り、よりよく生きようとする努力を認め、勇気づけるはたらきを重視する必要がある。</p> <p>それゆえ、「第3章 道德」第3の5では、さらに続けて、「道德の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする」と示されている。これは、道德性は人格の全体にかかわるものであり、不用意に数値などによる評価を行うことは適切ではないことを特に明記したものである。</p> <p>第2節 生徒理解に基づく道德性の評価</p> <p>1 評価の基本的態度</p> <p>生徒の道德性については、道德教育の目標や内容に照らして、<u>どの程度成長したかを明らかにすることが大切である。そのためには指導前や指導後の生徒の実態の把握に努め、確かな生徒理解に基づく道德性の評価を心掛ける必要がある。</u>その際、生徒一人一人の人格を、その全体像において理解することが大切である。</p> <p>道德性の理解を助ける資料等に基づいて、生徒の道德性について判断し、評価するのは教師である。したがって、常に生徒の立場に立って生徒を受容し尊重する共感的な生徒理解を心掛けるとともに、生徒の道德的な成長の姿を温かく見守り、よさを認めて励ましていく教師の姿勢が大切である。</p> <p>あくまでも生徒の道德性の評価は、生徒が自らの人間としての生き方についての自覚を深め、人間としてよりよく成長していくことを支えるためのものである。</p> <p>2 評価の観点と方法</p> <p>(1) 評価の観点</p> <p>生徒の道德性は人格の全体にかかわるものであり、いくつかの要素に分けられるものではない。しかし、その理解と評価に当たっては、指導との関係から、道德的心情、道德的判断力、道德的実践意欲と態度及び道德的習慣について分析することが多い。</p> <p><u>道德的心情については、道德的に望ましい感じ方や考え方、行為に対して、あるいは逆に望ましくない感じ方や考え方、行為に対して、生徒がどのような感情をもっているかについて把握する必要がある。</u></p> <p><u>道德的判断力については、道德的諸価値についてどのようにとらえているか、また、道德的な判断を下す必要がある問題場面に直面した際に、生徒がどのように思考し判断するか等を把握する必要がある。</u></p> <p><u>道德的実践意欲と態度については、学校や家庭での生活の中で、道德的によりよく生きようとする意志の表れや行動への構えが、どれだけ芽生え、また定着しつつあるか等を把握する必要がある。</u></p> <p>また、道德的習慣は、特に基本的な生活習慣をどの程度身に付け実践できているかを把握することにな</p>

る。

## (2) 評価の方法

道徳性を理解し評価するための特別の方法があるわけではないが、そのための資料収集の方法として、次のようなものが一般的に考えられる。これらの方法は生徒にとっては自己評価を促すものであり、教師にとっては生徒の道徳性の理解を深め、適切に評価し、指導を改善していく手掛かりとなるものである。

これらの方法には一長一短があるので、それぞれの特徴を生かして幾つかの方法を併用することが望ましい。

### ア 観察による方法

観察による方法は、生徒のあるがままの行動を観察し記録する方法で、毎日の生活の中で行われる。

この方法で大切なことは、観察の積み上げである。指導のねらいや方法に応じて、あらかじめ観察の観点を定めるなどして組織的、計画的、継続的に観察を行い、客観性を保持しようとする配慮も必要である。その際、外に現れた行動からだけ判断するのではなく、態度や表情の微妙な変化から行動の背景にある心の動きをとらえるなど、生徒の内面の理解に努めることが大切である。それとともに、生徒の道徳性の成長の姿や生徒のよさを積極的に記録し、賞賛していく姿勢が強く求められる。

### イ 面接による方法

直接に生徒と相対して話すことにより、その感じ方や考え方を理解しようとする方法である。面接が深まれば生徒の話し方や表情から内面的な心情までも理解することができる。そのためには、面接の心構えや技法など、カウンセリングについての研修を深めるとともに、生徒との心の交流を通して親密な人間関係を築きあげる努力が必要である。

### ウ 質問紙などによる方法

質問紙などによる方法は、あらかじめ作成した質問や生徒が直面すると考えられる問題場面での生徒の判断やその理由などを通して、生徒の道徳性を理解しようとするものである。主として道徳的判断力や道徳的態度の理解に適している。この方法は生徒の自己評価や保護者の目を通しての評価などにも活用できる。

### エ 作文やノートなどによる方法

作文や生活ノートなどには、生徒の生活体験、反省、意見、希望などが感情を伴って述べられているので、生徒の内面を理解することができる。作文や生活ノートなどによる理解においては、作文の行間に込められた感じ方や考え方を的確に読み取ることが必要である。また、生徒の文章に対して受容的な立場からの賞賛や励ましのことばを添えて返却することによって、教師と生徒との心の交流を深め、生徒の成長への意欲を喚起することができる。

また、グループ日記やグループノートなども有効である。

### オ その他

道徳的な成長への生徒の努力の姿や教師の指導の効果などについて具体的な事例をもとに検討していく事例研究法なども有効である。

## 3 評価の創意工夫と留意点

ア 評価のための資料に基づいて生徒一人一人の道徳性を評価するとともに、学級や学年の集団としての成長の姿を評価し、指導に生かしていくことが望ましい。

イ 評価のための資料が不十分であったり、矛盾したりするときは結論を急がず、他の資料を追加するなどして、長い目で生徒を見守ることが大切である。

ウ 道徳性の育成には、多くの場面や要因がかかわりあっているため、広い視野から総合的に理解する必要がある。そのためには、多くの教師やそれぞれの家庭の協力を得て資料を収集していくことが大切である。

エ 生徒自らの成長を実感し、さらによりよい生き方を求めて努力する意欲が生まれるよう、生徒の自己評価を工夫することが大切である。

オ 道徳性理解のための資料は、生徒のプライバシーにかかわる内容を含んでおり、その収集の仕方や収集した資料は慎重に扱う必要がある。

カ 特に指導を要する生徒に気付いたときは、直ちに適切な指導をすることが必要である。その場合、学級全体に対する指導を同時に、個別に相談的な指導を行う必要がある。経験豊かな教師や教育相談等の専門家の助言を求めたり、必要に応じて学年や学校全体で取り組んだりすることも大切である。

## 第3章 指導計画の作成と内容の取扱い

- 5 生徒の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。

## 第8章 生徒理解に基づく道徳教育の評価

## 第1節 道徳教育における評価の意義

教育における評価は、生徒にとっては自分の成長を振り返る契機となるものであり、教師にとっては指導計画や指導方法を改善する手掛かりとなるものである。「第1章 総則」の「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の2の(12)では、「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること」と示されている。

一方、道徳教育における評価については、「第3章 道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の5において、「生徒の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある」と示されている。つまり、道徳教育における評価についても、生徒自身による自己評価を生かして新たな目標への努力を支援するとともに、生徒の道徳的なよさや道徳的成長に対する共感的な理解に基づいて指導計画や指導方法を評価し、その結果を指導の改善に生かしていくことが求められている。

したがって、学校の教育活動全体を通じて行われる道徳教育及び道徳の時間について、指導の前後における生徒の心の変容を様々な方法でとらえ、自らの指導を評価し、指導計画や指導方法の改善に生かしていく必要がある。その際、よりよく生きようとしている生徒自身による評価の重要性を認識し、その内容を指導の改善に生かすとともに、生徒自身が道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚という観点から、自己を深く見つめ、考え、自らの道徳性をはぐくんでいこうとする力を高めることが大切である。

また、道徳性評価においては、生徒自らが成長を実感し、新たな課題や目標を見つけられるよう、教師が生徒の道徳的な成長を温かく見守り、よりよく生きようとする努力を認め、勇気付ける働きを重視する必要がある。

それゆえ、「第3章 道徳」第3の5では、更に続けて、「道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする」と示されている。これは、道徳性は人格の全体にかかわるものであり、不用意に数値などによる評価を行うことは適切ではないことを特に明記したものである。したがって、道徳の時間においては、こうした点を踏まえつつ、それぞれの時間のねらいとのかかわりにおいて、生徒の心の変容を様々な方法でとらえ、適切に評価し、指導の改善に生かすことが求められる。

## 第2節 道徳性の理解と評価

## 1 評価の基本的態度

生徒の道徳性については、道徳教育の目標や内容に照らして、どの程度成長したかを明らかにすることが大切である。そのためには指導前や指導後の生徒の実態の把握に努め、確かな生徒理解に基づく道徳性の評価を心掛ける必要がある。その際、生徒一人一人の人格を、その全体像において理解することが大切である。

道徳性の理解を助ける資料等に基づいて、生徒の道徳性について判断し、評価するのは教師である。したがって、常に生徒の立場に立って生徒を受容し尊重する共感的な生徒理解を心掛けるとともに、生徒の道徳的な成長の姿を温かく見守り、よさを認め励ましていく教師の姿勢が大切である。

あくまでも生徒の道徳性の評価は、生徒が自らの人間としての生き方についての自覚を深め、人間としてよりよく成長していくことを支えるためのものである。

## 2 評価の観点と方法

## (1) 評価の観点

生徒の道徳性は人格の全体にかかわるものであり、いくつかの要素に分けられるものではない。しかし、その理解と評価に当たっては、指導との関係から、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度及び道徳的習慣について分析することが多い。

道徳的心情については、道徳的に望ましい感じ方や考え方、行為に対して、あるいは逆に望ましくない感じ方や考え方、行為に対して、生徒がどのような感情をもっているかについて把握する必要がある。

道徳的判断力については、道徳的諸価値についてどのようにとらえているか、また、道徳的な判断を下す必要がある問題場面に直面した際に、生徒がどのように思考し判断するか等を把握する必要がある。

道徳的実践意欲と態度については、学校や家庭での生活の中で、道徳的によりよく生きようとする意志の表れや行動への構えが、どれだけ芽生え、また定着しつつあるか等を把握する必要がある。

また、道徳的習慣は、特に基本的な生活習慣をどの程度身に付け実践できているかを把握することになる。

## (2) 評価の方法

道徳性を理解し評価するための特別な方法があるわけではないが、そのための資料収集の方法として、次に示すア～オのようなものが一般的に考えられる。これらの方法は生徒にとっては自己評価を促すもの

であり、教師にとっては生徒の道德性の理解を深め、適切に評価し、指導を改善していく手掛かりとなるものである。

これらの方法には一長一短があるので、それぞれの特徴を生かして幾つかの方法を併用することが望ましい。

#### ア 観察による方法

観察による方法は、生徒のあるがままの行動を観察し記録する方法で、毎日の生活の中で行われる。この方法で大切なことは、観察の積み上げである。指導のねらいや方法に応じて、あらかじめ観察の観点を定めるなどして組織的、計画的、継続的に観察を行い、客観性を保持しようとする配慮も必要である。その際、外に現れた行動からだけで判断するのではなく、態度や表情の微妙な変化から行動の背景にある心の動きをとらえるなど、生徒の内面の理解に努めることが大切である。それとともに、生徒の道德性の成長の姿や生徒のよさを積極的に記録し、賞賛していく姿勢が強く求められる。

#### イ 面接による方法

直接に生徒と相対して話すことにより、その感じ方や考え方を理解しようとする方法である。面接が深まれば生徒の話し方や表情から内面的な心情までも理解することができる。そのためには、面接の心構えや技法など、カウンセリングについての研修を深めるとともに、生徒との心の交流を通して親密な人間関係を築きあげる努力が必要である。

#### ウ 質問紙などによる方法

質問紙などによる方法は、あらかじめ作成した質問や生徒が直面すると考えられる問題場面での生徒の判断やその理由などを通して、生徒の道德性を理解しようとするものである。主として道徳的判断力や道徳的態度の理解に適している。この方法は生徒の自己評価や保護者の目を通しての評価などにも活用できる。

#### エ 作文やノートなどによる方法

作文や生活ノートなどには、生徒の生活体験、反省、意見、希望などが感情を伴って述べられているので、生徒の内面を理解することができる。作文や生活ノートなどによる理解においては、作文の行間に込められた感じ方や考え方を的確に読み取ることが必要である。また、生徒の文章に対して受容的な立場からの賞賛や励ましの言葉を添えて返却することによって、教師と生徒との心の交流を深め、生徒の成長への意欲を喚起することができる。また、グループ日記やグループノートなども有効である。

#### オ その他の方法

道徳的な成長への生徒の努力の姿や教師の指導の効果などについて具体的な事例をもとに検討していく事例研究法なども有効である。なお、各種のテストを用いる方法もあるが、その場合は、その目的や注意事項をよく理解して使用する必要がある。

### 3 評価の創意工夫と留意点

生徒の道德性を理解し評価する場合には、以上のことを踏まえて整理するならば、全体として、次のような点に留意する必要がある。

- (1) 評価のための資料に基づいて生徒一人一人の道德性を評価するとともに、学級や学年の集団としての成長の姿を評価し、指導に生かしていくことが望ましい。
- (2) 評価のための資料が不十分であったり、矛盾したりするときは結論を急がず、他の資料を追加するなどして、長い目で生徒を見守ることが大切である。
- (3) 道德性の育成には、多くの場面や要因がかかわりあっているので、広い視野から総合的に理解する必要がある。そのためには、多くの教師やそれぞれの家庭の協力を得て資料を収集していくことが大切である。
- (4) 生徒が自らの成長を実感し、更によりよい生き方を求めて努力する意欲が生まれるよう、生徒の自己評価を工夫することが大切である。
- (5) 道德性理解のための資料は、生徒のプライバシーにかかわる内容を含んでおり、その収集の仕方や収集した資料は慎重に扱う必要がある。
- (6) 特に指導を要する生徒に気付いたときは、直ちに適切な指導をすることが必要である。その場合、学級全体に対する指導と同時に、個別に相談的な指導を行う必要がある。道徳教育推進教師、経験豊かな教師や教育相談等の専門家の助言を求めたり、必要に応じて学年や学校全体で取り組んだりすることも大切である。

なお、道徳の時間における生徒の様子に関する評価においても、これらの留意点を踏まえるとともに、慎重かつ見通しをもって取り組む必要がある。道徳の時間は、生徒の人格そのものに働きかけるものであるた



		<p>め、その評価は難しい。しかし、可能な限り生徒の心の変容をとらえ、それらを日常の指導や個別指導に生かしていくように努めなければならない。</p> <p>以上のように、道徳教育における生徒についての評価は、生徒が道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、自己のより豊かな心の成長を実感することができるように、道徳の時間における評価も生かしながら進めていくことが大切である。</p>
平成27年	<p>第3 指導計画の作成と内容の取扱い</p> <p>4 生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。</p>	